



「山口総合運動競技場建設一件」（県庁戦前A土木追加64）

文書館資料

武芸・体育・
スポーツと



➤ 15

たたかう *

山口県設グラウンド～関西一！スポーツの殿堂～

《近代社会とスポーツ》

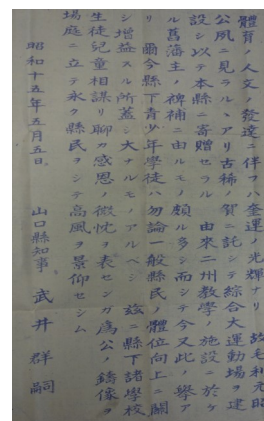
スポーツの社会的な認知度が高まると、記録という「ものさし」のもとに「競う」ことが意識されるようになっていきました。「教育としての体育」という精神的な世界観を残しつつも、「競技としてのスポーツ」が徐々に市民権を得ていったのです。やがて、ルールに基づいた競技を可能にする舞台が整えられていくことになります。都市の「しつらえ」としても競技場建設が望まれるようになります。こうして、スポーツをする者、スポーツをみる者が一堂に会する競技場が出現したのです。

陸上短距離の阿武厳夫、跳躍の田島直人、水泳の豊田久吉・松村昶子。山口県出身のオリンピックの存在も、山口での競技場建設の機運に拍車をかけることになりました。

《競技場はどこに？》

【防長閑話】東、恋路岳！西、出合川！此一番を以て本日の相撲は取納めでござい、八卦よいや残った△勸進元中野市長、行司菊山知事△年寄毛利公爵、近頃は大取組み、観衆百万△御最良筋には、恋路岳が宮野村上山口多勢、出合川が大内村下山口多勢△四股が踏まれた、立ち上がりました、出合川、腰が弱い、金が足らぬ△氣遣って区長連中総立ち△恋路岳、後はない、土俵をしっかりとふまえて正に四つに組んで動かない△さて、どちらを負かしても後生が悪いが引き分けに出来ない相撲で、行司も頭痛鉢巻△勸進元は懷中相談、さて采配はどちらに、最良筋に息つく暇ありません△お陰で最良筋では夜に昼をついで金算段汗だくたの体たらくである（昭和9年3月9日「防長新聞」）

昭和8年(1933)、県設総合運動競技場が山口市に設置されることが決定。



「山口競技場
引込道路工事一件」
（県庁戦前B3068）

昭和15年12月、公爵毛利元昭の胸像がお披露目されました。西洋神殿風の建家に覆われた胸像の台座にはめこまれた銅板レリーフに、競技場建設時の毛利元昭の功績が記されていました。

この新聞コラムは、競技場誘致でざわつく世情をユーモラスかつ的確に伝えてくれます。

市内各地で誘致運動が繰り広げられ、陳情書が飛び交いました。「市制5周年記念事業」とか「学都山口の偉容をととのえる事業」とか、いろいろな大義名分が掲げられ紛糾が深まってきました。湯田温泉を中心とする観光遊覧エリア構築、県庁・亀山近傍を中心とする政治文教エリア構築が当時の山口市の未来予想図でした。それは、近傍の町村を含めて「大山口」という視点で企画されるものでした。結局、宮野村（折本・恋路）、山口市（古熊・湯田）、大内村が候補地として絞り込まれました。輻輳するさまざまな思惑をよそに、最終的な裁定は菊山嘉男知事に委ねられることになりました。

《大内村川向》

昭和9年3月12日、大内村川向が県設グラウンドの設置場所に決定したことが菊山知事から発表されました。山口駅に近く交通至便の地であること、天神川・仁保川のせせらぎに面し、姫山や象頭山のふところに抱かれ、兄弟山・方便山の眺望の得られる山紫水明の地であること、天神川護岸整備とのリンクにより一体的な公園整備が可能であること、平坦地であり整地が容易であること、などの観点から総合的に判断した結果であることが強調されました。

《毛利元昭公から山口県民へ》

昭和9年3月4日の新聞紙上に公爵毛利元昭のステイトメントが公表されました。「自らの古稀記念として競技場設備を山口県に寄附する」、つまり、建設経費を毛利家が負担することが明らかにされたのです。



▲大内村川向の競技場建設用地（雨村家文書398）

施設の内訳は、▼野球場（1万人収容、ネット裏・内野に観覧スタンド）▼陸連公認陸上競技場（1万5千人収容、正面観覧席、100m直線コース、400mトラック）▼水連公認水泳場（500人収容、50mコース、飛び込み台設置）▼球技場（2千人収容、庭球場4面、排球場・籠球場各2面）というものでした。

設計は県内務部土木課、昭和9年7月25日地鎮祭挙行、12月整地工事竣工、昭和10年10月12日、「西日本に誇るスポーツの大殿堂」は毛利公爵から山口県知事に贈呈されました。開場式では市内の小中学生によるマスゲームが祝賀ムードを盛り上げ、13日には開場記念の球技大会・陸上競技会が開催されました。旧藩主毛利家から県民への運動競技場贈呈は、「スポーツによる健康増進」「スポーツがもたらす健全な社会形成」のメッセージが託されていたものと思われます。

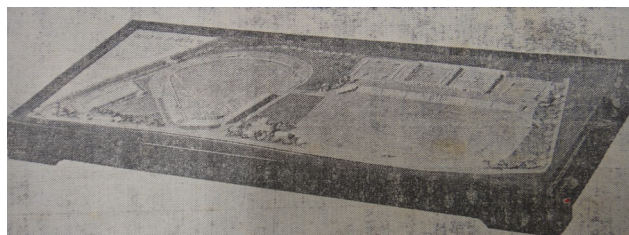
《県設グラウンドのきらめき》

昭和12年（1937）8月7日、総合運動競技場内野球場で開催された職業野球オープン戦「大阪タイガースvs名古屋軍」。先発マウンドに上がったのは、大阪タイガースの主戦投手かつ巧打者としてその名を轟かせていた御園生崇男（投手外野手登録の「two-way player」）。防府出身の御園生は、山口中学のエースとして昭和8年の選抜中学校野球大会（春のセンバツ）に出場、大阪タイガースの創設メンバーのひとりでした。

この日、6番ピッチャーで先発出場した御園生は、打者としても3本のホームランを記録。その快投巧打をたたえる観衆の熱狂的な歓声が野球場を包み込んだのでした（試合は11-9で大阪タイガースが勝利）。

開場後、各種競技会がこのグラウンドで開催されましたが、この職業野球の興行が県設グラウンドが最も華やいだ一日となりました。景勝地に姿を現した豪華な競技場を、神宮外苑のように軍靴の響きが包み込むことはなかったようですが、スポーツによる健康を標榜した毛利公爵の意志をよそに、この興行の入場料収入は国防献金とされました。

昭和38年、山口国体開催時に、市内吉敷に競技場が新設されて、この「スポーツの殿堂」は徐々にそのネームバリューを失って行くことになりました。



▲競技場の模型（昭和9年3月14日〔防長新聞〕より）